



高梁から始める、ローカルキャリア

R6 高梁 大人の里山留学
コーディネーター：矢動丸祐子



佐藤紅商店で吹屋産唐辛子の選別作業をする矢田さん(右)

「巻き込まれ力」からうまれる地域の新たな価値。

里山留学生には、応募時点で高梁市(吹屋)に対する興味関心や取り組んでみたいことを聞いてはいますが、事前に明確な役割や活動(仕事)内容が決まった状態で高梁市に来るわけではありません。高梁市への到着後に、地域の方とコミュニケーションを取りながら暮らし、活動内容を組み立てます。実際に行われた特徴的な活動をいくつか紹介します。▽Zの運用講座と運用支援▽「令和のとと道」を削いで食べる会▽吹屋内店舗の運営サポート▽カフェのオリジナルメニュー開発と限定営業▽吹屋の子どもたちに向けたハロウィンイベント▽吹屋内の展示スペース改善

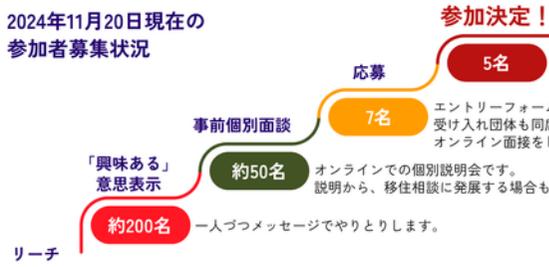
地域に100の課題があるならば、「100通り以上の関わり代がある。自分×地域」で自分らしく挑戦する、大人の移住体験プログラムが始まりました。人気の秘訣はどこにあるのか、レポートします。

「仕事がないから移住できない」を過去のものへ。

今年度から始まった新事業「高梁大人の里山留学」は、地域おこし協力隊インターン制度を活用した移住体験プログラムです。五月の募集開始から既に200名以上が興味関心を示し、インターン事業の全国事例の中でもトップレベルの人気が出ています。二〇から三〇代が「移住」を考えると、同時に考えるのがキャリアの話。令和二年の内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局の調査でも「地方での暮らしを最初に意識したきっかけ」で最多なのが「ライブプランやキャリア」でした。

とはいえ、高梁市での既存の仕事では選択肢が限られるのは周知の通り。そこで、都市部では叶えられなかった「暮らし方」と「キャリア」

の両方を叶えるために、自らキャリアを切り拓き、高梁市で仕事を作ることができると考え、本プログラムを開始することにしました。



令和六年度は試行として、移住の受け入れ団体と滞在住居があり、地域一体となって本プログラムの趣旨を理解して下さった吹屋を滞在地としています。滞在中の里山留学生は地域の暮らしと仕事を体験します。仕事のひとつは、地域の資源や課題と、本人のスキルや強みを活かした「マイプロジェクト」です。自身の経験や強みを地域の中で活かせることを実感し、地域の中でキャリアをつくるイメージを膨らませてもらうことが狙いです。どんなに小さなことでも良いので滞在中に「自分×地域」の掛け算をすることで、地域の中で居場所と役割を参加者と地域住民双方で認識して、その先の移住・定住や関係人口創出に繋がります。



高尾戸美さん (滞在: 10~11月 (2ヶ月) 昨年東京都から玉島に移住。ミュージアムの展示やワークショップのプロとして活動。多文化共生分野でも活躍。)
大演萌さん (滞在: 10~11月 (2ヶ月) 東京都在住。ネットショップ運用支援やプロジェクト進行管理などを中心にフリーランスとして活動中。
矢田里菜さん (滞在: 9~11月 (3ヶ月) 神奈川県在住。フランスとしてSNS運用をはじめとするファンマーケティングに従事。出身は青森県。)

動を共にする動きです。これまでに10名以上が招かれ、既存の観光だけでは経験できない高梁市での滞在を体験しました。滞在中の動きをコーディネートするのは里山留学生本人たち。中には、プロカメラマンや芸術家、医者や南極越冬隊員の方もおり、来訪者と地域の方とを繋ぐ重要な役割を担っていました。

高梁市でなら実現できる、ローカルキャリアをさらに。今年度の里山留学の受け入れは、二月までです。十二月以降も二名の参加が決まっています。また、十一月まで滞在中の三名は、各々が今後の高梁市への関わり方や具体的な移住検討を進めています。本事業を開始し多くの方から興味関心を寄せていただく中で、移住する前に「都市部では叶えられなかった暮らし方と働き方を試したい」という、フリーランスや事業主の方のニーズがあることが分かってきました。それを踏まえて、市の資源や課題と照らし合わせながら今後の事業を検討したいと思っています。

裏面へ続く

写真右から、1:吹屋の歴史について学ぶ里山留学生、2:鮭の科学館での勤務を経験を活かし「令和のとと道」として鮭一匹を削いで食べる会を開催した高尾さん、3:本業のSNS運用のノウハウを活かした講座を行う矢田さん、4:吹屋のカフェ金子やでオリジナルメニューの限定営業を行う大演さん。





「ただいま、」と言える ふるさとを増やす

R6 高梁 大人の里山留学
コーディネーター：矢動丸祐子



写真右から、1,2:地域の方と交流する山下さん・室さん・加治さん、3:吹屋の子もたちと里山留学生とで雪だるま作り。

「高梁大人の里山留学」のコンセプトに込めた思い。

「ただいま、」と言えるふるさとをふやそう、「おかえり、」と言える仲間をむえよう！

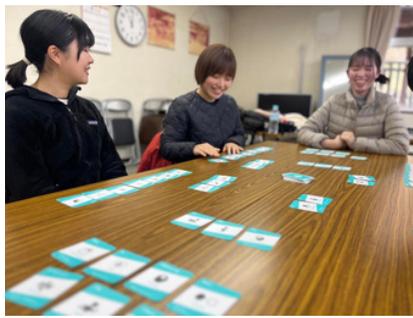
これは、本事業につけたキャッチコピーです。「地域で暮らし、活動する」という内容の里山留学ですが、滞在するにも活動するにも、参加者自身はお客さまではなく、いち住人であり地域を担う当事者である、ということを大切にしたいと思設計しました。一〜三ヶ月という滞在期間でも地域に馴染み、再び高梁を訪れた際には実家に帰った時のように「ただいま」「おかえり」が言い合えるようなあたたかな関係性を作れたら、という想いを込めました。高梁が参加者のみなさんにとっての第二・第三のふるさとになり、高梁を支える関係

人口、その先では移住・定住に繋がるよう、プログラムを作っています。

募集活動では、参加者・地域共にギャップを少なく。

参加者の募集では、吹屋の移住サポート団体「吹屋に住んでみんな会」の方々と意見交換をしながら、具体的な参加者像を設定していききました。さらに、参加を検討している方とのミスマッチを防ぐために、移住情報や転職・インターンシップの情報サイトを調査し、ニーズと合致するサイトへ募集を掲載。本事業を見つめる→応募する→参加する→関わり続ける、という動きを具体的にイメージして募集をしています。結果、今年度参加いただいている方々にはミスマッチがない状況が続いています。丁寧な募集活動には時間も根気も必要ですが、里山留学の運

営におけるとても重要な工程です。



大事にしたい価値観を整理・共有するワークショップ

生き方・キャリアの視野を広げる、伴走支援。

高梁大人の里山留学では滞在中の暮らしと活動を充実させ、ここでの経験が今後の生き方やキャリアに繋がるような伴走支援を行なっています。その一つが、週一回行っている「振り返り会」です。

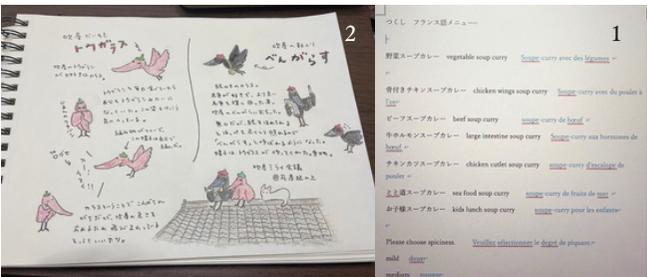
の方との交流は、多様な生き方を学ぶことにも繋がっています。特に自営業者が多い吹屋では、「何を生業に生きていくのか」「自分はどうかしたいのか」という、人生のあり方を考えるきっかけにもなっているようです。

「地域×自分」好き・得意が活きるマイプロジェクト。

「自分が好きで続けてきたことが、誰かの役に立つ経

会では、一週間の中で体験・挑戦したことを写真と共に共有し、気づきや学び・印象に残った事等を振り返ります。定期的な振り返りは自身のメタ認知に繋がり、自分らしい滞在期間の過ごし方を見つけるヒントにもなります。

さらにこの時間では、滞在中に限らず自身が大切にしたい価値観やこの先挑戦してみたいことにも注目した対話の時間も設けています。普段とは違う環境で過ごすからこそ自信を客観的に見つめることもでき、里山留学と自分のキャリアを結びつけて考える機会としています。また、地域



写真右から、1:室さん作成の英語とフランス語のメニュー表、2:加治さん製作中の絵本



室 音羽さん

・滞在：1月中旬～2月中旬(1ヶ月) 神奈川県在住。フランス留学を経て大学を9月卒業。吹屋滞在中は、得意の語学を活かして海外の観光客を迎えるための整備をしている。



加治 愛理さん

・滞在：1月中旬～2月(1.5ヶ月) 東京都在住。社会人を経て現在はデザインやイラストを学ぶ美術大学生。絵本作家を目指し、吹屋滞在中にも1冊執筆している。



山下 さくらさん

・滞在：12～1月(2ヶ月) 愛知県在住。歌が好きで、「地方の音楽フェスとまちづくり」をテーマに卒論を書くべく、吹屋滞在中に音楽イベントを開

ニケーションがあることが日常です。だからこそ、自然と「地域と自分の掛け算」が生まれ、好きなこと・得意なことが活きる機会が都市部よりも多いのではと思います。目の前の困り事や、あつたら良いな、に自分を掛け合わせて動いてみる。そして「あなたがいてよかった」という状況が生まれ、地域の中で居場所と役割が見出されること。これこそが、「地域に100の課題があるならば、100通り以上の関わりしろがある」という事であり、関係人口や移住・定住に繋がるヒントだと考えています。

里山留学生と、これからの繋がり。

今年度の里山留学は、社会人や大学生など計六名が参加しました。参加者全員、そして地域の方から「また来ます」「また来てね」の言葉を聞くことができています。さらに、高梁へ通うことや移住を決めた方もいます。今後参加者の方々と高梁市との繋がりを深め続け、高梁市の仲間を増やし続けていけたらと思います。